自己改革
ＪＡ紀南の挑戦

連載⑤　梅・ミカン等の輸出

青梅は４年で30倍に拡大
海外販促には生産者も同行

ＪＡ紀南は、農業者の所得増大の取り組みの一つとして、青梅や梅加工製品、ミカンなどの輸出に力を入れている。輸出先は香港を中心にシンガポール、マレーシア、台湾、タイなどで、欧州も視野に入れる。青梅の輸出量は平成29年産で23トンと、開始初年の26年に比べて約30倍に増えた。ＪＡでは３年前に英語の堪能な女性の人材を雇用して海外営業に派遣している。田辺市や県とも積極的に連携し、現地で青梅やミカンの販促活動を行い、近年では生産者も同行する機会をつくっている。

マレーシアのクアラルンプールの高級スーパー、浴衣姿で青梅の販促を行うＪＡ紀南の下岡三穂さん（写真右、昨年６月）

ＪＡ紀南の農産物輸出の取り組みは、約10年前に梅加工製品が始まっていたが、ＪＡ和歌山県農や市場との連携を強め、平成25年に温州ミカンや晩柑などのかんきつ類、翌年から「南高」を中心とした青梅に取り組む。

28年度の輸出額は約２１００万円で26年に比べ４倍強に拡大した。内訳は青梅、かんきつ類、梅加工製品が３分の１ずつ。特に青梅は金額で30倍近く、梅加工製品は４倍強になった。29年は過去最高となるのが確実な見通しである。

青梅輸出量の約９割を占めるのが香港。昨年も５月から６月にかけて百貨店やスーパーで「南高」やパープルクィーンが販売された。店頭では青梅と梅ジュース用の氷砂糖やリカー類とともに、青梅が陳列され、「南高」が１キロ当たり１０００円前後で販売された。

香港で糖度の乗った木熟みかんをアピールする生産者で田辺市柑橘振興協議会副会長の中山仁視さん（昨年12月）

期間中は、ＪＡ紀南と田辺市でつくる紀州田辺うめ振興協議会が、ＪＡや市職員や生産者を派遣し、店頭で試飲や実演などの販促活動を行っている。

活動にはＪＡ加工部で海外営業を担当する下岡三穂さんが同行する。下岡さんは海外での留学や就労で培った英語力を生かし輸出関連の営業や商談ができる人材で、年に約10回は海外に渡航しており、青梅販促など生産者との同伴の活動では通訳として活躍する。

店頭では下岡さんが作った英語版の梅酒・梅ジュースのレシピに関心を示す客が多く、梅ジュースの試飲に次々と手が伸びる。下岡さんは「海外に『ＵＭＥ』を広げたい。香港でも６月は和歌山の梅という感覚が定着している」と手応えをつかむ。昨年は初めてマレーシアの首都・クアラルンプールで青梅の実演販売を行った。

かんきつ類は、10月から４月に、温州ミカン「天」やデコポン、清見、せとかを香港やシンガポール、台湾に輸出する。下岡さんは「香港の方は甘い物が好きで、世界のいろんな商材が集まっており、紀南のミカンも嗜好に合っている」と話す。

梅と同様、かんきつ類も販売期間中、田辺市とＪＡ紀南による紀州田辺柑橘振興協議会がシンガポールや香港での販促活動に生産者などを派遣しており、現地の消費者の好反応に、参加した生産者も輸出拡大への期待感を感じている。

下岡さんは、「チョーヤ梅の実（梅酒の果実）」や練り梅、ゼリー、ジュースなど梅加工製品も海外に積極的にアピールしている。ＪＡ紀南は今年４月に製造を始める梅や晩柑の「ドライフルーツ」も絶好の商材ととらえている。

ＪＡ紀南は自己改革の実践を通じ農業所得の増大や地域の活性化にチャレンジしています